

少女は神を怖れない

宝犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生命の神秘を自らの手で発生させることを夢にしていた老人、白神源助。彼は70年の歳月をかけ、生物の能力を20倍にまであげる薬品、「ゲノムブレイク」を完成させた。夢が叶ったことを確信した白神だったが、突如感じた胸の痛みに全てを奪われる。

しかしそんなことで夢を諦める白神ではなかった！

夢を諦められない白神は死を超越し異世界へ渡る。

これはそんな狂った魂に取りつかれた少女のはなし。

同名作品を小説家になろうの方でも連載していましたがそちらは無理やり完結させました。週1投稿を基本に長く続けていきたいです。

目次

プロローグ

主人公の性格設定集	1
01 狂人は踊る	7
02 狂人はふとましい	12
03 狂人は牢屋に入る	20
04 狂人は心が弱い	28
05 狂人は地獄耳	35
06 狂人はチョロイ	43
07 狂人は騙される	51
08 狂人は茶髪にあう	57

プロローグ

主人公の性格設定集

前世時代

稀代の天才、完全なる狂人など様々な呼び名が前世からあつた研究者(?)白神。彼は常識では考えられない、いや常人には考えつかない方法で様々な薬(?)を作り出した。友達及び理解者はほぼゼロだったがほとんど気にすることなく研究活動にいそむ。

白髪、白髭のリアルダンブ〇ドア。

研究こそ人生の生き甲斐。

性格タイプ 狂人、変人、

言動 自己中心的

行動 自己中心的

主義 自分が良ければ何でもよし

少女憑依

体の主の本名はレーラ・マール(33)

もともとは裕福に家に住んでいたが両親が五歳の時死去。その後叔父に引き取られ、遺産を奪われ本人は虐待を受ける。スラムに逃げたあとは体を売って生活していたため非常に色っぽい。

ジジイが憑依後は10歳前後の容姿に若返りしている。

薔薇色の髪、真紅の瞳が特徴である。

性格は前世からほぼ変わらないが少し精神が幼くなった気がしないこともない。

声が高く可愛いのでまだ許せる部類。

性格タイプ 狂人、変人、主人格

言動 自己中心的

行動 自己中心的

主義 自分が楽しければよし！

―特殊状態―

あまりにも魔法が効きすぎるためにその魔法の効果を受けているときは主人格の記憶には残らない。

ただし特殊状態化の人格の奴らには憑依する前の記憶はある。

銀のベッド

区別 魔道具 囚人用

通常効果 マイナス思考レベル1

身体能力半減

実際の効果 マイナス思考レベル5

精神虚弱レベル2

身体能力1/5

性格タイプ 廃人寸前

ヒステリック

言動 怯えた発言多数。ただしジジイ言葉

怯えすぎて語気が強くなることも。

行動 基本ベッドの中

主義 個人主義

備考 不意に優しくされるところつと

落ちるチョロイン

チャーム

区別 通常魔法 初級魔法 M 1

通常効果 魅了レベル 2

精神奴隸化レベル 1

実際の効果 魅了レベル 2

精神奴隸化レベル 8

狂信者レベル 3

陶酔レベル 2

性格タイプ ご主人様の思う通りに

言動 ですます口調。

失礼な言動はない。

行動 ご主人様の仰せのままに

フェリー

区別 魔法印(額) 初級魔法 M 1

通常効果 安静レベル 1

実際の効果 安静レベル 3

不安レベル3

マイナス思考レベル6

性格タイプ 怖がりさん

消極的。

言動 消極的であまり話さない

行動 受け身

シルク

区別 魔法印(舌) 初級魔法M1

通常効果 素直レベル3

実際の効果 素直レベル4

精神奴隸化レベル8

陶酔レベル1

性格タイプ 素直 従順

言動 ですます口調。

基本穏やか。

行動 滅多に怒らない

補足ちなみに魔法はレベル10でカンストして新たな項目が生まれます。そしてレベル1に戻り、繰り返す形です。

01 狂人は踊る

「ほっほっほー！」

一人の老人の不気味な叫び声が聞こえた。老人はひどく興奮しており、しきりと何かをしゃべっている。近くのゲージには白いマウスが一匹入っており、ゲージの中を縦横無尽に駆け巡り、今にもゲージは壊れそうだった。

「ついに、ついに、ついにい！　ワシの研究の成果が現れたのじゃ！　ほっほっほ！　素晴らしい、素晴らしい、素晴らしい、素晴らしいぞ！」

老人の名は白神源助。白神は興奮のあまりその長い白髪と白髭を振り乱し踊りまくっていた。これは彼がテンションが上がってしまった時についてしまう癖だ。手を上げたり下げたり、横に振ったり、思いのままに踊っており、その様は盆踊りなどの躍りなどよりヨサコイのような激しいものだった。

ただし、白神は別にゲージの中の現象に興奮していたわけではない。彼が興奮している理由は現在彼が左手に持ち頭上でぶんぶん振り回している緑色の液体の入ったガラス瓶なのである。

白神には夢があった。それはまだ若き日にテレビか何かで生物の神秘について特集

を見た時にできた。白神は人間が作るものなどとは次元のちがう神秘的な特性に圧倒され、強い衝撃を受けた。そしてそれと同時に自分の手でそれと同レベルの現象を作り出したいと強く願うようになった。

そして白神は約70年の歳月をかけて、この緑色の液体を完成させた。液体の名は「ゲノムブレイク」。その効果は投与された生物のあらゆる遺伝子の働きを活性化させ、通常の能力を20倍にまで上昇させてしまうというもの。今までの常識からは考えられない代物だ。しかし白神はそれを個人で完成させてしまったのである。

「ほっほー！ ほっほっほー！」

およそ狂人にも見える白神だが、天才というものは多かれ少なかれ変人が多いものだ。白神はそのなかでも郡を抜いていた。

白神は人生の絶頂にいた。あとはこの薬をあらゆる生物に投与し、研究するだけだった。そしていつか自分の夢である生物の神秘を再現する。それこそが白神の望みだった、のだが、、、

「うう！ ぐうう、な、なんじゃこれは、、、」

白神は突如胸に強い痛みを覚えた。今までに感じたことない痛みだった。痛みからか、力が抜けてしまったのか、手から薬が入ったガラス瓶が落ちる。

ガシヤン！

まるで今までの全てが無駄になるような、そんな予感を白神は感じた。

「ぐ、ぐはあ！」

口から大量の血を吐き出し、うつ伏せなる。全身の力は抜けていき、呼吸も苦しくなっていく。

突然のことで事態を把握できない白神だったが、その闘志は衰えていなかった。彼の心にあるのは強い生への執着だった。

(やっと、やっと達成できるのじゃぞ？ ワシの夢が現実となるのじゃぞ？ こんなところで死んで良いのか？ 言いわけないじやろうが!!!)

思えば彼の人生は研究だけだった。そしてその研究は全く認められず、いつも小馬鹿にされてきた。認められず、夢も達成できずに死ぬのは彼のプライドが許さなかった。

(死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん死ねん!!!)

薄れ行く意識の中で、そう願いつづけた彼はついに死を超越した。

彼の魂は天高く飛び、とてつもない意思をもって導かれるようにどこかへ消えていった。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

(どうして私は不幸なの?)

女は血のように赤い瞳から涙を流しながら考えていた。この世界は力ないものに残酷だ。そう女が気づいたのは

5歳の時。いつも優しくかった父と母が死んで叔父に引き取られた時だった。叔父は商人で金持ちだったが、彼女を奴隷のようにこきつかった。毎日叔父の機嫌次第で虐待を受けた。

10歳の頃からは性的な虐待が加わり、食べ物も二日に一回程度しか与えられなかった。

耐えられなくなりスラム街に逃げるまではよかったが、それでも結局体を売らなければ食べ物にはありつけなかった。年齢が30を越えたことで、どんどん客も付かなくなっていく。身体を売るのは苦痛だ。しかし生活のために必死に身体を売る相手を探し誘惑する。彼女はその矛盾した行為により心も体もボロボロだった。

(誰か、私を殺して。)

心からの願いだった。誰かに救ってほしかった。しかし自分では怖くて死ねない。彼女は苦しんでいた。それを哀れに思ったのか、突然女の中に何かが入っていった。

ドクン、ドクン!

胸に鋭い痛みが襲ってくる。女はうずくまり胸を押さえた。ひどい痛みだ。このままでは死ぬだろう。そう女は直感した。そして彼女はすぐに抵抗をやめる。その顔は先程とはうってかわって幸せそうだった。彼女にとってはこの現世こそが地獄なのだ。

その後、彼女の体からまばゆい光が発せられた。

身体つきがどんどん幼くなり、くすんだ赤茶色だった髪が一切のくすみのない、真っ赤に染まった。肌も瑞々しく白く綺麗になった。女も幼い頃はとても美しいと評判の娘だったが、現在の彼女とは比べることさえできないほどだった。それほどまでに美しかった。

彼女は閉じていたまぶたを開いた。血のように赤い瞳は以前となんら変わらないが、その瞳に宿る生命力は雲泥の差だった。そして薄いピンク色の唇を開き、鈴の鳴るような声を発した。

「ほっほっほ。ワシ復活じゃ！」

ここは血と魔物の国、ローレンス帝国。軍事に魔物を取り入れ、圧倒的戦力によって領土を増やしてきた軍事国家。その帝国の帝都の外れにあるスラム街に一人の少女が今、現れた。

後に「神を怖れぬ者」と呼ばれ、世界に多くの災厄をもたらす少女である。

02 狂人はふとましい

〜一話から数十時間後〜

(む、なんじゃこは?)

彼女(じじい?)は、目を覚ますと同時に混乱した。今彼女は長めの布を一枚体にくるんでいる状態で椅子に座っている。なかなか上等な椅子で座り心地もなかなかだったりする。布も肌触りのよいものだ。

ただ、普通に座っているわけではないのだ。両手両足全て椅子に縛られていた。

そして彼女の目の前にいる一人の男もまた普通ではなかった。豚のようにブクブクと太って脂ぎった男。年齢はまだ若そうだが、頭頂部はすでに寂しくなってきた。口は半開きにしており、口からは生暖かい息が彼女に向けて送られてくるのだ。

「ふうう〜ふうふうふうう。 はあはあ。 幸せだ。」

(きもいきもいきもいきもい)

前世男である彼女だが、それでも目の前の存在は不快感しか浮かばなかった。彼女は血のように赤い瞳を反らし目の前に広がる信じられない光景を見ないようにしようと

した。が、それは全く効果がなかった。男は彼女の綺麗な赤い髪を手に取ると、櫛でするようにといた。

「おほ！ おほほ！ すべすべ!! すべすべ過ぎい!! うほお！ うほほほほほほ！
チエリーちゃん最高だよ！」

(きもいきもいきもいきもい)

少女は天を仰いだ。ちなみにチエリーちゃんとはブタ男(仮)が勝手に名付けたものである。名前の由来はズバリ見た目らしい。

「決めた！ 僕君と結婚する！ 永遠の愛を誓うよ！」

(いやじゃいやじゃいやじゃいやじゃいやじゃーあれ?)

(なぜじゃ？ なぜ声がでんのじゃ?)

「ふふ、かわいいなあチエリーちゃんは。僕が君にかけた<サイレント>は大声を消すだけの初級魔法だからホンとは色々言われるんじゃないかって不安だったんだ。」

(な、何をいつておるのじゃ? ワシは声どころか表情すら変えられんぞ?)

たがしかしブタ男にはチェリーの表情は変わらずに見え、声も聞こえない。ブタ男は少女の喉を優しく撫でる。そこには自身の血で書いたくサイレントの魔方陣がある。

「君を守るためなら僕は何でもできるよ、。僕の愛を受け取ってほしい。」
しかし一向に返事はない。

返事のしないチェリーに痺れを切らしたブタ男は強引にチェリーの頭を掴むと、下に何度も下ろさせた。

それが意味するものとは、…、?

「うんOKのサインだね! ホント、シャイでかわいいなチェリーは。大丈夫、僕は君の思ってること全部わかってるよ! ずっと笑顔だし、僕といて楽しいんでしょ? よし、ならこれも受け取ってくれるよね?」

そういつたブタ男は少し緊張したように、顔を真っ赤にさせ、なにやらニヤニヤして

いる。

(な、なんじゃ？ 何をされるんじゃ？ いやじゃ！ 何をされてもいやじゃ！ 結婚もいやじゃ！ や、やめろー！)

次の瞬間ブタ男がその脂ぎった顔を近づけていき、今までで一番デカイチエリーの声にならない悲鳴が冴え渡った。

。。。なぜこのような事態になってしまったのか。

その答えを知るには15時間前まで遡らなければならない。

—————15時間前

「ほっほっほー！ ワシ復活、気分最高じゃ！」

復活したチエリー(じじい)は有頂天だった。夢が破れたと思った瞬間、また夢を叶えるチャンスが訪れたのだ。これで調子に乗らないチエリーではない。チエリーは大声で笑ったり、恒例の喜びの躍りを舞ったりした。

だが、チエリーは大切なことを忘れていた。彼女はもともとは30を過ぎた娼婦だったのだ。そして現在は10歳前後の美少女。衣服はほとんど脱げて、つまりは裸で踊っていた。そしてそれにチエリーは気づけなかった！（気付け！）

当然かなりの騒ぎになった。

それから約10時間にも及ぶスラムにいた見物人の男性によるチエリー争奪戦が始まったのであった、。

奪つては奪われ、奪われては取り返すという泥沼の戦いに発展した。

結局勝者は飛び入り参加で偶然帝都から奴隷を買いにきていたところ坊っちゃんであった。彼は彼女を手に入れるために100枚の金貨を使って見物人をほとんど買収したらしい。

ちなみに彼女は3時間経過辺りから意識がない。

—————そして現在に戻る。

通称ブタ男、もとい金持ちの坊っちゃん、本名ブータン・ダラダーラは彼女に愛のキ

スをしていた。今年20歳になるブータンにとってそれは初めてのキスだったが、日々こんな日のためにとシミュレーションを欠かさなかったため本人としては自信があった。

彼女の膝に尻を乗せ、抱きつくようにキスをする。

口の中に舌を突っ込み舐めまわす。チェリーの唇や舌、歯茎の柔らかさを感じながら、自分の唾液を送り込む。手で頭を押しさえつけ、さらに蹂躪する。

ブータンはここが天国であると思った。

チェリーはここを地獄と確信した。

だか、調子に乗った奴というのはやはり足元を掬われる物なのである。

ぶちい。

大量の血がブータンの口から吹き出る。

ブータンはチェリーに舌を噛みちぎられたのだ。

チェリーはゴミでも見るような目でブータンを見ていた。

「はっ、はうう、はあ。」

声にならない声を上げ、チェリーの肩に顔を乗せてもがき苦しむ。その状態を20秒

程続けたあと、やがて呼吸音すら聞こえなくなった。

「ほ、ほほ。わ、ワシにこんなまねをするからこうなるのじゃ！　じ、自業自得じゃ!!」

前世からかなりの変人であるチェリーだか初の殺人であった。少しは思うところがあつた。少しは思ふところがあるのかも知れない。

チェリーは口から大量の血を足らしながら自分にのし掛かるブータンを罵倒する。目は血走っており、初の殺人により興奮状態にあるのかも知れない。脂ぎった体がどんどん重くなり、重心が下になって肩辺りにあつた顔が太もも辺りにまで落ちる。ブータンの口からでる血が太もも辺りにたまっていく。

「死んでなおワシに不快な思いをさせるとはもはや敬意すら覚えるぞ。ブタめ。」

太もも辺りにたまった血はそのまま下半身全体に伝つていった。それを忌々しく思うが身動きは取れないままだ。

「さて、どうすればいいんかの？」

このままでも飢え死に。誰かが来ても第二のブタ男になるかもしれない。チェリーは絶望しながら呟いた。

そんな時だった。

ガチャリ。

ドアのノブが回された。

さて一体何が現れるのか。

続く！

03 狂人は牢屋に入る

ガチャリ。ドアのぶが開いた。

中に入ってきたのは四人の男だった。黒いシルクハットのような長めの帽子をかぶり、緑と赤の色鮮やかな制服のようなものを着ている。左右の腰にはそれぞれ棒と剣がさしてある。

(こいつらもみんな敵つい顔じゃの。きつとブタ男と同種じゃな。どうせ夢も叶わんなら道連れじゃ！)

そう直感したチェリーはなるべく元気がないように見せるため下に視線を集める。近づいた瞬間に首に噛みつき、頸動脈を噛みきるつもりだった。もはや彼女に躊躇する気はない。

四人の男たちは最初、部屋に漂う血の匂いに顔をしかめ、ブタ男を見てさらに顔を陰しくした。

そして最後に血まみれになった一人の少女を見つけ、もともと険しかった顔は憤怒の表情に変わった。

比較的先頭にいた帽子から金髪が漏れている男はすぐに左側の腰にさしてある剣を抜いて少女に近づいた。

(い、い、い、い、い)

そしてあと一步で射程圏内というところまで入った。

が、不意に厳つい男たちの中でも一際厳つい大男が何かに気付いたように口を開いた。

「待て！」

大男の声に反応して金髪の男は歩みを止めた。顔はとても不満そうである。

そんな金髪の男に大男はため息をついた。そしてゆっくりとブタ男の口辺りを指差し、その後少女をさして静かに言った。

「メルシーを使え」

大男の言葉に金髪の男は雷に撃たれたように固まり、その後少女を驚愕の表情で見たあと、頷いた。

右手に持っていた剣を腰の鞘にしまい、右側の腰にさしてある棒を抜いた。そして棒

を少女に向け小さく言う。

「スリープ」

次の瞬間棒から煙のようなものが飛び、少女の周りを漂う。5秒程漂ったあと煙は段々と消えていった。

そうして意識を失った少女は守備隊により身柄保護兼重要参考人として本部にある留置場に連れていかれることとなった。

—————

（ある守備隊の団員）

俺の名は光速のラインバック、守備隊入隊二年目で赤組に抜擢された期待のホープだ。赤組はメンバー10人というまさに少数精鋭の部隊であり逮捕や潜入など危険の多いところだ。まあつまりは無能には出来ないってことだな。はっはっは。

「おい新人、うるさいよ。黙って仕事しろ。」

ちえ、注意されちまったぜ。実力社会のここでは弱え奴なら無視することもできるんだけどなーこいつは無理だな。

今俺に注意した奴はこの赤組でも三番手の実力を持つからな。

キンリート・カルロス。金髪のロン毛のいけすかねえ野郎だけど年が俺とたった4つしか違わなくてこの実力は正直尊敬してる。まあ口うるせえ野郎だけどな。

「どうしたんですか先輩。なんかイライラしてませんか？」

俺の横にいた同期のケビンが言った。眼鏡を抑えながら言ってるのがなんか腹立つ。このネクラ眼鏡め。ちなみにこの眼鏡は報告書を書くふりして落書きを書いてやがった。ホントにこんな奴が同期とか悲しすぎるね！

「うん？ いや別にイライラしていたわけではないぞ。お前らがあまりにも集中していないからな。今期は外れかもな。」

な、なんだどう？ 俺が外れの訳があるか！ 外れは横にいるやつだけだよ。

「そうなんですか？ てつきり僕は例の女の子のことが気になってるんじゃないかと

思ったんですけど。ちなみに外れは隣でぶつぶつ言ってるラインなんかただですよ。」

あー？ なんだとテメエ喧嘩売るつもりかあ？ いいぜ勝ってやるぞその喧嘩あ。

「女の子？ 何を言ってるかわからないな。あーそこにいるなんとかバツクが外れなのは同意だ。ただし付属で眼鏡もついているがな。」

あーテメエ金髪くそ野郎、誰がなんとかバツクじゃこの野郎う。まあ眼鏡が俺のオマケっていうのはあつてるかもな。

「えーそうなんですか。意外でした。でも変だなあ副隊長があのとときのカルロスの顔はひと三人位殺せるっていつてたんですが。確か今日あたりに意識が回復するから会いに行く予定じゃないんですか？」

「ぐ、あ、会いに行くのではない。尋問だ。彼女は重要参考人だからな。」

お、金髪が返答にどうもるなんて珍しいな。さては凶星だな。

「凄くかわいって噂ですけど彼女。もしかして職権乱用ですか？先輩。」

眼鏡も畳み掛けてくるな。ここは乗るしかないか。

「先輩きめえつすね。」

数秒後光速のラインバックは地に沈められた。

余談だが彼への周りからの評価は馬鹿とか空気読めないやつというマイナスな物が
多い。

「あ、言つときまずですけど、この鈍足のリュックサックの方が付属ですからね。まあ誰の目
から見ても明らかでしょうが。」

余談だがメガネも同じくらい不評だったりする。

(む、ハハハはどこじゃ?)

チエリー(仮)は目を覚まし、自分がフカフカのベッドで寝ていることに気がついた。

(ワシはどうしたんじゃつけ?)

チエリーは必死に記憶を辿ってみるが、最後の部分だけ思い出せなかった。確か自分
は四人の男に襲われ、道連れにしようと画策したはず、いくら悩んでもそこまでしか彼

女は思い出せなかった。

「ワシは無力じやの」

ぼろっと出た自分の言葉に彼女は酷く傷ついた。かつてあれほど夢のためなら全てを投げうってでもやるという情熱があつた彼（彼女）だが、度重なる出来事でかなりメンタルが弱つていた。

ひとりで涙が流れ、頬をつたう。声は出さずただ涙を流すだけ。その光景は彼女にとつては辛いものだったがもし誰かがこの光景を見ていたのなら一瞬で惚れてしまうだろう。それほど美しかった。

否、見ている人物はいた。ドアを少しだけあけ、バレないように息を潜めていた。誰から見ても変態であるそいつは少ししてこの場面を誰かに見られると不味いと気付きすぐにその場を後にした。

ドアの目の前に金色の長い髪が落ちているのを眼鏡をかけた真面目そうな青年が見つけたそうで、犯人の変態はその後陰から金髪の変態と呼ばれているらしい。

続く。

04 狂人は心が弱い

「あら、起きたのね。」

一人の女が少女（じじい）の居る部屋にドアを開けて入ってきた。年齢は20代後半位の女だったが服装はやはり赤と緑の制服である。

「ここがどこだか分かる？」

女は目の前にいる少女に話しかけるが泣き腫れた目を隠しながら少女は首を振った。

「そう、ここはエルグラム兵病院よ。本来ならあなたはすぐに重要参考人として牢屋行きだったんだけど、魔法の効果が切れた後も意識が戻らなかつたからここにいてもらったわ。でももう移動しないとね。」

「い、嫌じゃ。どこにも行きたくない！」

少女は酷く狼狽した様子でベッドにしがみつき、離れようとしな

「わがまま言わないで。あなたには容疑が掛かっているのよ？ それも殺人よ。ここでごねるようなら罪が重くなるわよ。」

再度要求するが少女はふるふると首を振った。

「仕方ないわね、ならこつちも力強くでいくわよ。」

（うーん一応危険人物だから触れるなどは言われてるけどこれ銀のベッドだし力が出さないよね？）

囚人専用の銀のベッドには2つの魔法をかけてある。一つは筋力半減、もうひとつはマイナス思考弱だ。どちらも逃走防止用だ。

そして女が少女をこちらに寄せようとに触れた時あることに気付いた。

「あなた、震えてるの？」

少女は体を小刻みに震わせ、この世の終わりのような顔をしている。女は事前に得ていた情報（男一人の舌を噛みきる）とのギャップに驚いた。

（これはもしかして、）

ある可能性に気付いた女は右腰に差してある銀色の棒を取り出す。金髪の男の物よ

りは小さめだ。

「この棒をよくみて、ええそうよいいわ、少し眩しいけど我慢して。」

そういつて銀の棒を少女に向けながら小さく叫ぶ。

「<サーチ>」

その棒の先端が光り、少女を貫くように光が通っていき、その後一周して棒に戻って行った。

「やっぱりマイナス思考がレベル5に成ってるわ。あとは新しく精神虚弱状態が付いてるわね。しかもレベル2。筋力半減に至っては筋力1/5になってるじゃない。」

少女は明らかに効きすぎている。それは一般的にはあり得ない出来事だった。なぜならこの世界の間には魔力が必ずあり、その魔力の最低値を基準にして魔術は定義されているからである。

（つまりこの子には魔力がない、もしくは限りなく少ないってこと？ そう考えれば今まで意識が戻らなかつたのも<スリープ>の効きすぎだったと説明できるわね。）

女は目の前で心細そうに小さく震える少女を見ながらここからどう運ぶかを考えた。精神虚弱状態は言うなれば心が折れかけている状態のため少しの刺激で廃人になってしまう可能性があるのだ。

ちなみに精神虚弱状態はマイナス思考がカンストした時に起こる進化状態である。カンストはレベル10でおこり、カンストすると1に戻る。

(もう二回もカンストしてるし、レベル3になったら終わりね。一刻も早くこのベッドから出さないと。)

廃人となってしまったらほとんどの人間は戻れない。そのことは誰でも知っていることだった。

「もう一回この棒を見てくれるかしら？」

そういつて泣きじやくる少女に優しく言う女。端から見るとイジメにも見えるかもしれない。

少女はさすがのようにその棒を見た。

「<チャーム>」

女がそう叫ぶと同時に棒の先端からピンク色の光が出て、少女を照らす。と、同時に少女の瞳は赤からピンクに変わった。顔は蕩けるように甘くなっている。

その状態をみて、女はため息をついた。

「ご、ご主人様あ、そののに見つめられたら変になってしまいます。」

少女は顔を赤くしてもじもじと恥ずかしそうに喋りながらベッドから出て女に近づいていく。

依然とは口調もかなり違う。

(私はいつからサキュバス並みの魅了使いになったんだろう、、、。)

サーチは三十分ほどは永続して情報を見続けられるのだが、少女が狂信者レベル3と陶酔者レベル4、精神奴隷化レベル8、魅了レベル2に変わったのを確認して女は頭を押さえた。

「面倒なことになった。」

守備隊赤組隊長兼守備隊隊長を務めるダグラスは報告書を見てそう呟いた。彼は肉体派の守備隊の中でも特に巨漢中の巨漢であり、いつも顔は鬼の様に怖い彼だが、その

時の彼は苦虫を嘔み潰したような顔だった。

悩んでいるのは一人の少女についてである。

少女についてわこることは名前がチェリーであること。もうひとつが魔力が全くないことだった。ただチェリーという名前は少女を発見した屋敷の主人である故人ブータンの手帳に記載されていただけなのであまり信憑性がない。

彼が悩んでいたのはつまり少女の罪状である。一般的に守備隊は犯人と思われる人物を捕まえた場合、その人物を取り調べし、可か不可かを決める。可とされればあとは罪の重さに従って然るべき処置がされる。

つまり守備隊は司法を司っている訳なのだが、冤罪率はほぼゼロと言ってよい。なぜなら彼らには魔道具があるからだ。血に含まれる魔力は金属を中間に挟まなければ放出することは出来ない。

守備隊に捕まった時点で体に取り付けられた金属は全て没収され、逆に守備隊の利になる金属が取り付けられる。なので捕まえた時点でそいつが犯人なら終わりというパターンであった。誤認逮捕をした場合もすぐに自白で犯人ではないことが確認できる。

このシステムのお陰で一部の特権階級を除くほとんどの人間には一切の嘘もつけない完璧な状態であった。

しかし問題の少女であるのだが。

(今までの報告で彼女は通常の何倍もの効果を受けてしまうのは明らかだ。特に精神操作系は特に顕著にその特徴が現れているな。)

ちなみに報告書には身体能力系は3〜5倍、精神操作系では20〜50倍の効果を受ける」と書いてあった。

もはや精神操作系は全てアウトだろう。

(しかもこのデータは全て初級魔法のデータだからな。もし、もともと効果があらわれることを前提に作られた魔法や魔道具を使ったらどうなるか、)。)

別に囚人なら良いじゃない、という声もあるだろうが罪が確定してないうちは善良な市民として扱う、それが彼のポリシーだった。

更に加えるなら部下の中に彼女の安全を訴える団員が多数居るため、彼はこんなに悩んでいるのである。

続く。

05 狂人は地獄耳

ガシン！ ガシン！

牢屋の扉に何かがぶつかっているような音がする。

音は断続的に聞こえ、中の住人は相当外に出たいようだ。

守備隊長ダグラス・ドリアードはその音を聞き、顔をしかめながらそのドアを開いた。その中には予想していた通り十歳程度の美少女が叫びながらドアに体当たりしているというシュールな光景をみることができた。

「ガツガツ当たるな馬鹿が。罪を重くされたいのか？」

ダグラスとしてはなるべく冷静に相手を落ち着かせるためにいったつもりだったが、相手はここ最近の腑抜けではないのだ。体調万全だ。

「うるさいわ若僧が！ ワシに意見するな！ 早くここから出せえ！ もうこんなところ

こりこりじゃ！　ワシは研究せねばならんことがあるんじゃああ！」

そう、奴に危険だからと遠慮して魔道具や魔法を使わなかったせいで主人格（狂人）が復活してしまったのだ。

もつとも隊内でこれが主人格だと見抜いているのは恐らくダグラスを含む数名だけだろう。ちなみに金髪と魅了の女はチェリーちゃん保護したい派だ。

「貴様は今どんな立場かわかっているのか？　貴様のその性格を見れば、貴様が殺人を犯したのは一目瞭然だ！

本来なら奴隷か禁固どちらかの刑になるだろう。

まだ可と出してないだけありがたく思え。」

（まあ可と出せない理由は内の隊の奴等が庇いまくるからなんだがな）

さつさと可と出してしまいたいのが、チェリー保護派の意見である魔力無しによる魔法を受けたあとの副作用として今の状態（主人格）に成ってる説を否定する根拠がないかぎり強硬は出来ない。

「ふん！　ワシは知らんもん！　あんなブタ男知らんもん！　ワシはキスされたんじゃぞ？　男にキスされたんじゃぞ？　そんな奴は舌かんで当然じゃろ！」

「今のは自白か？」

「いいのじゃ！別にワシには許されるのじゃ！だからワシ研究させろ！はよさせろはよさせろはよさせろ」

（やっばどう見ても狂ってるだろ。何でこんな奴にうちの隊の奴らはメロメロなんだ？）

不思議に思うダグラスだったがこれには理由がある。実は彼女はまだ危険人物に指定されているので会いにこれるのは看守以外は副長以上なのである。つまりは人伝でしか隊員達は聞いてないのだ。だから信じてくれないのだ。

「まあ貴様の反応は予想通りだ。いつもならここで耐えられなくなつて（怒りが）帰るんことになるが、今日は強い助っ人がいるんだぞ？」

こういう場合に手っ取り早いのは身元引き受け人を呼ぶことだ。彼女の容姿も体質も性格もかなり変わっていたため、あまり期待せず秘密裏に募集したが、思いもよらず

大物が釣れた。

ダグラスはチェリーを見て不敵に笑う。

チェリーはダグラスの方を見ておらずあくびしている。

怒ったら疲れて眠くなったのかもしれない。

「今日は眠いから明日にしてくれ。」

そういつて助っ人が来ることを全く聞かずに助っ人が来る前に大きないびきをかきはじめた。

がそれに慌てるのはダグラスだ。何せ大物が釣れたのだ。これで来てみたら本人が寝ていたとかあり得ない。

機嫌がわるくなれば自分の首が飛ぶ、それほどの大物が釣れてしまったのだ。

「おい、起きろ貴様！ 殺されたいのか？ 貴様！ 早く起きろ！ おい寝るな今日え開けてだろ、おい寝るなって、起きろ！ 起きろ！ 起きろ！ 起きろ！ 起きろ！ 起きろ！」

まったく起きないチェリー。前世からの特技でどんな状態でも寝れるというものが

あるのだ。

コツ、コツ、コツ。

足音が近づいてくる。

(まずいまずいまずいあの方の機嫌次第では俺の首が切れる(物理)。)

「貴様起きろ！ まじで起きろ！ いや起きてくれ！ 頼む起きろ！ ていうか聞け！

もう何でもいいから起きてくれ！ おい、おい。まじでそこまできてるんだよううう。」

ガチャン。

「あれ、なんかキャラ違くないですか？ 隊長。」

そこにいたのは部隊随一の情報通である眼鏡の部下だった。

「あー、ゴールドマン將軍は？」

「急用が出来たそうで一週間後に変更らしいです。

その連絡を伝えにきました。」

「では僕はこれで「待て！」

暫しの沈黙。

「なんですか？」

「あーなんだ、昇進に興味あるか？」

「彼女が関わってるんですか？」

「そうだ。ゴールドマン將軍はかなり変わった方だが中央でもトップに入るほどの力を
持っている。この話に一枚噛んでみないか？」

少し考える眼鏡。

「わかりました。このケビン・レンズ、將軍及び隊長のため慎んでお受けさせていただきます。」

「そうか、なら今お前の見たものなどないな？」

「はい！ 決して眠っている少女に鬼のような形相で迫る隊長など見ていませんし覚えていません！」

「う、いや待てボーナスも出そう。」

「僕は何も見ていません！」

「うむ、下がってよし。」

「失礼しましたー！」

ガチャン。

（ち、思わぬ出費だがまあ仕方ない。俺のイメージをこんな狂人のせいで潰したくないしな）

今回の計画、それは彼の今後の将来に大きく関わっていた。成功すれば昇進、少しでも機嫌を損ねればよくて左遷、悪くて私刑。リターンとリスクの比率がおかしいが上には逆らえないのが彼らである。

(まああいつなら何か役にたつだろう。とりあえず、一週間後だな。)

「それまではおとなしくしといてもらうか」

そういつて牢屋から出ていった。

「良いこと聞いちゃったの。」

少女の鈴の鳴るような声が密かに聞こえた。

06 狂人はチヨロイ

コツコツコツ。

夜中の深夜、ある牢屋の一室で物音がした。

当然犯人はチェリーである。

「ほんとはトコトンこだわりりたいところじゃが何分時間も材料もないからの。まあ妥協するしかないの。」

寝たふりをして聞き耳をたてたときに得た情報、”ゴールドマン將軍” その存在をかなりの富裕層と見たチェリーはせつせと何かを作っていた。

「やっぱ金じゃしの、相当の金持ちじゃろい。將軍ていうのもなんかよい響きじゃよな。」

ちなみにチェリーは將軍が階級であるとは思ってない。ただのコードネーム、もしくは偽名だと思っている。

「どうせ金持ちでワシを保護しようとする奴などブタ男に決まっとるしな。ならそれを利用してやらんとな、。。。」

そういつてチエリーはじぶんの髪を3本ほど抜いた。

「あといるのは鉋物が少しと血液じゃな。それと金属と布か。ベッドのシーツと金具で代用出来るかの。あー何か毒物もいるな。」

外から見ても何をやっているのか分からないが何かやっているのだろう。狂人の思考回路は意味不明なので考察しても無駄なのである。事実前世でも彼を理解できる人物は一人として現れなかった。

「あとは投与する動物じやが、何かおらんかのう。」

まあ最悪油虫でもよいが、。」

彼女はコップの中に作り出した薬品（泥＋髪の毛＋金属＋唾液＋石＋布＋血をよく潰してかき混ぜたもの）を手に持ち周りを探す。

「やっぱこつちの世界では初実験なんじゃし、出来ればかわいい奴に投与したいの。」

そういつて辺りを見回すがここは守備隊の牢屋。また魔物使いの多いこの国ではネズミ一匹はいる隙があることも許されないのだ。

「うーむどうするかのを」

折角薬（？）が作れたのだからと辺りを探す彼女だったが、不意にあることに気がついた。

（そうじゃった！それがあつた！）

少女は満面の笑みで明日を待つてベッドに入った。

「こいつがチェリーか。」

ゴールドマン將軍の発する声は場の空気を制圧するようだった。それほどの威圧感がある。

彼の右斜めと左斜めにはそれぞれ隊長とメガネがいるのだが、朝にある騒動があつたためか、なにやら元気がない。

なぜ元気がないか。

理由は当然チエリー関連である。

具体的には部屋に入った瞬間に隊長は襲われた。

隊長の口のなかにゴミ（チエリーの作った薬）を飲ませたのである。この世の物とは思えぬ味、ひどい腹痛、頭痛などかなり隊長の機嫌と体調は悪い。

しかし隊長は一刻も早くこの狂人を引き取って欲しいため、また自分の保身の為気を取り直し將軍の機嫌を取る。

「そうです。どうでしょうこの赤というより紅に近い薔薇色の髪。強い意思（強すぎる）を秘めた真紅の瞳。

肌は一切の染みも皺もなく、顔の造形も言うこと無しです。必ずや將軍に気に入ってもらえるでしょう！」

最悪の体調なのにまるで奴隷商人のように堂にはまった隊長はペラペラとチエリーについて語り出す隊長にはさすがとしかいえない。相当薬（ゴミ）を飲まされたことを根に持っているようだ。

横から見ていたメガネは新たな恐喝の種を見つけ、情報一字一句逃さないようメガネを光らせ耳をすましている。哀れ隊長。

「最後に彼女の性格ですが、控えめにいって狂っていますので、使用の前には魔法を使う

ことをオススメします。ただし特殊体質なので初級魔法以上は使わないでくださいね。」

かつては彼女の無罪を信じ、体質に遠慮して魔道具を使わなかった隊長だがもはや見る影もなくなってしまう。そんな隊長の様子にメガネは更にメガネを光らせる。

ちなみにチェリーは大人しくなせるために血文字で最下級精神干渉魔法である〈フェリー〉がかけられている。

効果は安静レベルなのだが、現在どうなっているかは〈サーチ〉を使っていないので分からない。

ちなみに〈サーチ〉が使えなかった理由はあまりに時間がなかったためである。なぜ時間がないのかというと以下略。

「お前は何か勘違いしているな。これはそういう目的で貰うわけではない。」
今まで黙っていた将軍が声を出した。

ちなみに将軍は日に焼けた色黒のスキンヘッドである。

「だがまあお前らに説明したところでどうしようもない。こいつは貰っていくぞ。」

わりとクールに話を切った将軍は少女の近くに歩いて行く。果たして本当に真の目的があるのだろうか？

将軍がチェリーの髪を指でとかし、頬に触れる。

「ひゃ、ひゃう。」

どうやらチエリーはかなり精神が弱っているようだ。

「うむ、これはいいな。では貰っていくぞ。」

「はい、一応極秘だと言うことなので裏口から退出ください。」

「うむ、お前等は最後まで勘違いしていたがまあなかなか手際よくやってくれた。何か困ったことがあればいい。」

「はい！ ありがとうございますすー！」

そういつて目の前で震えるチエリーをヒョイツと持ち上げお姫様抱っこして持ち去っていった。

隊長は危機が去ったことに胸を撫で下ろし、メガネは大物権力者の変態疑惑にメガネを光らせた。

*

(チエリー視点)

ううう。こわいよお。わしを抱っこした色黒マッチョのハゲの人はそのまま裏口からでてわしと一緒に乗り物に乗りこんだ。わしの顔や首を触ってくる手の動きが不快

じゃ。でも拒否したらもつとひどいことになりそうじゃ。わしはどうすればよいの？

「おい、口を開け。」

「は、はい。」

つい素直に口を開いてしまう。この人の声はとてもこわいのじゃ。

「良い子だ。」

そういつて頭を撫でて貰った。凄く安心する。この人はいい人なのかう？

しかし次の瞬間指を口の中に突っ込まれた。

「うう、ううう。」

な、何をするんじゃ。やめてくれえ。怖いのじゃ。

なんか舌が熱いのじゃ。血の味がするのじゃ。

「<シルク>」

何か頭がスツキリした。あれ？ 私は誰？

ここはどこ？ 怖いよう。

「よしと、これでこっちは消えるな。」

額を擦り、頭を撫でてくれるこの方は一体誰なんでしょう？

凄く優しい、凄く安心できます。

私の全てをあなたに捧げます。

「あ、ありがとうございます。」

「ああ、大丈夫だ。俺のことは主人様とよべ。」

「はい！ 主人様！」

07 狂人は騙される

「む、ハハハはどっこじゃ？」

古ぼけたベッドの上でチェリーは意識を取り戻した。牢屋と違う周りの風景に驚きながらあたりを見回す。

鉄のドアもなく、コンクリートの部屋でもない。

変哲もない少し古くて狭い宿という感じである。

ガチャリ

五メートルほどさきにある木製のドアが開いた。

中に入ってきたのはチェリーには見知らぬ大男だった。

日に焼けた褐色の肌にスキンヘッド。

その視線はとても厳しく、人三人は殺していそうなほどだった。まあそんなことチェリーには関係ないのだが。

「誰じゃ？ 貴様。ワシはお前のような奴は知らんぞ？」

チエリーの最後の記憶（オリジナル）は「ゴールドマン」に取り入るため、自家製の薬を隊長に飲ませたところまでしかないので、彼の存在がなんなのかがわからなかった。まあチエリーは研究さえできればいいのだが。

「俺様の名前はサルタージュ・ゴールド。お前の身元引き受け人だ。ダグラスから聞いていなかったのか？」

「あのゴールドマンとかいうダサイ名前のやつか？」

「ああそれだ。まああれは偽名だから。まあそんなことはどうでもいい。お前はやりたいことがあるんじゃないのか？」

ゴールドは適当にはぐらかしチエリーに尋ねる。そうチエリーにはやりたいことがあるのだ。

「そうじゃ！ ワシにはやりたいたいことが山ほどあるのじゃ！ お前は協力してくれるのか？」

チエリーのやりたいたいこと、当然実験・研究・投薬である。ゴールドはそんな彼女を見て

にんマリと笑みを深めた。

「ああ、俺は協力者だ。お前の他の人格に聞いたんだが、お前には特別なことができるの
だろう?」

「そうじゃ! ワシは天才科学者じゃからの!

まだまだ色々作るんじゃない!」

チエリーは研究できることにとつてもウキウキしていた。過程は違ったが、当初の予定通りパトロンをゲットできたことに満足である。

「そこでだ、お前には留学してもらおう。」

そんな彼女を見ながらゴールドが言った。チエリーは耳を疑った。

(留学? 何をいっておるんじゃない? ワシに学校にいけと言うとんのか?)

小学校すら満足に行こうとしなかった彼女にはそれは大きな抵抗感があったしそもそも研究に学校は関係ないと思っていた。彼女はその真つ赤な眼でゴールドを睨み付ける。

「まあそう睨むな。今の世の中はな学歴と実力の両方がなければやっていけないんだよ。まあ異世界から来たお前は知らないだろうが、今は戦争中だからな。」

ゴールドは淡々と説明する。学歴が無いものは無能と呼ばれ、まず特攻隊に入れられる。実力の無いものは正規軍でも普通に死んでいく。科学者などの後衛は特に無駄な

予算をさくことができないため学歴が必須なのだ。

「お前が有用なのは俺様がわかっている。だかこの国では実績も学歴も無いものにはチャンスがない。まあ魔力がないお前は学校に入ることすらできんがな。」

「な、なんじやと貴様！ お前が個人的に支援してくれんじやないのか?！」

「ふん、俺様がなんでそんなに金を出してやらんとならん。どうせ完成してもコンペでまけるだろしな。」

高い金を出して完成させた薬も実績なければ信用されず採用されない。ゴールドにはそんなことをする気はさらさらなかった。

(それにもっと有用な使い方があるしな。)

「お前には最北にあるノールマン学園にいったらどうだろう。」

このエクスタリア大陸で一番薬学が発達している学園だ。しかもあの学園があるコールド王国は魔力なしでも差別せんからな。安心していけ。」

そういつてゴールドは一枚の封筒を差し出す。中には細長い一枚の紙と切符が入っていた。

紙には出身国”レザノフ公国”

推薦人”サルタージュ・ゴルド”と書いてある。

チケツトにはノールマン学園とだけ書いてあった。

「この切符を使えば乗り継ぎなしで学園に行ける。

何、心配すんな。我がレザノフ公国とゴールド王国は同盟国だ。それに俺の署名もある。それを見せれば特待生扱いしてもらえるさ。」

チエリーは紙とチケツトを交互に見て、やがて諦めたようにゴルドを見た。

「ち、仕方ないがお前の言う通りにしてやるわい。

帰ってきたらちゃんと援助するんじゃないぞ？」

チエリーとしても実は薬の学園ということで興味が湧いていた。

「ああ、それは任してくれ。あと最後の重要なことを言うぞ。お前の体にはいくつかタトウーを入れておいた。

それはレザノフでは当たり前のことだから仕方なくくれたんだが、学園の奴らは怪しむかもしれない。そのときはレザノフの伝統とでも言うっておけ。」

（うん？ タトウーじゃと？ そんなものどこにあるんじゃない？）

チエリーは今囚人服を着ていなかった。サクラ色のパジャマのようなものを着ていた。腕などを捲ってみてみるがどこにもない。

「タトウーは三ヶ所に入れた。額と胸元と下腹部だ。」

まあ額以外はバレンと思うがあんまり見られんようにな。
「む、なんじゃと?」

チエリーはあわてて胸元を見ると血のように赤い模様が描かれていた。ちなみに下腹部にも別の模様が描かれていた。

「色はお前の髪に合わせといてやったぞ。まあ精々がんばれ。」

ゴルドはにやつきながらチエリーにいい放った。

続く。

08 狂人は茶髪にあう

ローレザノフ公国 キングルツプターミナルー

「ここじゃよなあ？」

一人の少女がある建物の前で途方に暮れていた。少女とは当然チェリーである。チェリーはあのあとすぐに馬車に乗せられ、ここに連れてこられたのである。

「前世でもこんな見えたことなかったのう。た、高いのう。」

チェリーの目の前には高さ五十メートル程の高い円形の塔が建っている。色は鉛色で金属でできているようだ。

「駅なんじゃよなあ？　これ。」

チェリーは前世とあまりに違うその駅の形に疑問を持ちながらとりあえず入り口を探した。

どうやら馬車は不親切なことに入り口の逆側におろしたようでチェリーはなかなか見つけれられない。一応裏口もあることにはあるのだが、初見のチェリーには見つかることができなかった。

円周約40メートルのためもう少し歩けば見つかったのだが、彼女はその前に”彼”と出会ってしまつた。

「やあ！ 君かわいいね。何か困つてるの？」

そいつは長めの茶髪を後ろで結んでいる割りとイケメンな男だつた。ニヤリとした口元はとても軽薄そうである。

「む、すまんがこれを受理してくれるところはどこじや？」

しかし途方に暮れていたチエリーはこれ幸いにと切符が入っている封筒を渡した。

彼はじろじろと品定めするようにチエリーを見たあと封筒を開いた。切符を取り出し、なにやらうさんくさそうにチエリーを見たあともう一度封筒を覗き、彼は一瞬だけ何かにとても驚いたような顔をした。

「うん、この切符の入り口はあつちにあるよ。でもこれは残念だね。この切符は期限切れだよ。」

「な、なんじやとう?!

う、嘘じや！ それはさつき貰つたばかりじやもん。」

信じられない、という表情でチエリーは叫ぶ。

「あーあ、君は常識をあんまり知らないんだね。可哀想に。いいよ、証拠を見せてあげよ。」

そういうと彼は手に持っている彼女の切符とは別に自分の懐からもう一個の切符を取り出し、チエリーに見せた。

「ほら、君の切符には赤い判子が押してあるだろ？」

僕には青い判子だ。赤い判子の意味は使用済みってことだよ！」

「な、なんじゃとおおおお?!」

チエリーは驚愕した。この青年のいう通りなら自分はそのゴールドマンとやらに嵌められたのだ。

(じゃけど、ワシを嵌めて何のメリットがあるんじゃ?)

もし自分をゴールドマンが嵌めたとしても奴が自分を嵌めるメリットがない。その気付いたチエリーは青年が自分を騙そうとしているのだと気付き、睨み付ける。

「おいおい、そんなに怖い顔で睨まないでくれよ。」

だいたい君を騙して僕に何のメリットがあるのさ!

それに怪しむならそのゴールドなんとかってやつだろ?

大方君は捨てられたんだよ、そいつに。」

「む、な、なんじゃとう?」

チエリーは確かにゴールドマンが意地が悪そうなのは同意だったため、またしてもどうすればよいかわからなくなってしまう。この青年が自分を騙す意味はないのだ。

「そこでだ！ そんなお困りのあなたに救いの手を差しよべてやろう！」

茶髪の青年はそう高らかに宣言すると自分の青い切符を少女に渡し、封筒を自分の懐に入れた。

「これはプロート学園行きの手ケットさ。こっちは青いから使用済みじゃないし使えるだろ？」

「ほ、ホントにいいのか？ ならありがたく貰っておくぞ！ でもワシの推薦状は返してほしいのじゃ！」

特待生とやらに成るには推薦状がないといけない。そうゴールドマンに聞いたのだ。まあ今となつては自分を騙した男だが、利用できるものは利用する。チェリーはこの異世界に来てからそう学んだのだ。

「おっと、つまり君は僕にタダ働きしろつていうんだね。少しぐらい手数料を貰わないとこの切符もあげられないな。」

青年は信じられないという顔でチェリーを見る。

「む、わ、わかった。それはやるから早く連れていってくれ！」

彼の気が変わらぬうちに早く駅を出発しなければならなかったためチェリーは観念することにしたようだ。

「なら、これで交渉成立だね。よしと、入り口はこっちだよ。」

そういつて彼は先導していく。

その先には2つの円形の入り口があった。一つは青色、もう一つは赤色だった。「よし、そつちの入り口で券をかざして。」

そういわれたチェリーは青い円形の入り口に券をかざす。

「認識完了」

そう音がなり、ドアが開く。

「ここからは切符を持つてる人しか入れないんだ。

だからここでお別れだね。」

茶髪が話しかけてきた。

(ということはお役ごめんということじゃの)

「ふん、世話になったな。」

そつけない反応で茶髪に興味を失ったチェリーは建物に入ってしまった。

「こつちのセリフだね☆」

彼が満面の笑みで隣の入り口から駅に入ってしまったのはいうまでもない。

「む、ここに切符をいれるのか。」

建物の中に入るといくつかの部屋があり、それぞれに名前がついている。部屋の大きさは電話ボックスぐらいだ。

チェリーはプロト学園行きの部屋の前にたち、切符を中に入れる。

「よし、入るか。」

そういつて彼女は学園行きの転送部屋に足を踏み入れていった。

続く。